

ヨーロッパ、米国における満洲学…過去、現在、未来

マーク・エリオット（翻訳 松谷 基和）

最近の約一〇年間に、北米における中国史研究、とりわけ「帝国後期」——具体的には元朝、明朝、清朝を意味しますが——に関する研究において、いくつかの新しい傾向が現れてきたことは容易に指摘できます。例えば、女性研究やジェンダー研究という新たな研究領域に加えて、辺境史、環境史、経済、物質文明、そして民族性（ethnicity）に関する新たな研究も現れてきています。こうした研究の中で、特に重要なものは、しばしば「新清史」（New Qing History）と称される研究の流れです。

新清史には二つの著しい特徴があります。ひとつは、清朝の秩序を構成する諸要素のうち、とりわけ清朝が中国の王朝でありながら満洲族によって建国・統治されたという事実に係わる要素を真剣に評価することを共通の関心事項としている点です。従って、新清史学派に属する研究者達は、清朝を明朝にいくつかの表面的な変化を施しただけの

「単なる中国王朝のひとつ」として特徴付けることを問題視します。むしろ、彼らは清朝を正しく理解する上で、内陸アジア理解の重要性を強く主張します。こうした方法論を用いる研究者は、近代中国の国民形成における満洲族支配の意味に関しては勿論のこと、中国史一般における満洲族支配の意味についても新しい問題提起——さほど新しくない場合もありますが——を行っています。例えば、満洲族は少数ではありますが、如何にしてあれほど複雑な政体を長期間に渡って効果的に支配することができたのか？ 清朝の支配者が漢民族ではなく満洲族であった事実は、中国人（漢人）、そして中国史の叙述にどのような違いをもたらしたのか？ しかしながら、こうした問いに答えるためには、中国語のみならず中国語以外の言語による史料を用いることが不可欠となります。こうした中国語以外の史料への信頼というものが、新清史の第二の重要な特徴で

1 ヨーロッパ、米国における満洲学：過去、現在、未来 エリオット

す。これまでは主に満洲語の史料が、新清史の研究者達の最も大きな関心を集めてきましたが、近年になって清帝国内の他の言語——モンゴル語、チベット語、チャガタイ語——の史料も研究に利用されつつあります。

帝国後期の世界における非漢人の視点を研究に取り入れる傾向が、近い将来、重要性を増すというのは、あくまで予想に過ぎません。ですから、こうしたアプローチが持つ研究史的重要性をより良く理解するためには、それが現れてきた歴史的背景について一度振り返って検討することが有意義であると思います。本日の発表においては、私は「新清史」における満洲語の役割についての評価に限定してお話を申し上げたいと思います。以下では、まず満洲学とはそもそも何を意味するのかという問いを検討することから始め、続いて西洋における満洲学の歴史を、十七世紀のヨーロッパにおける起源から二十世紀にはば消滅するに至るまでの期間について概観し、最後に近年になって復活した北米における満洲学について論じたいと思います。

満洲学とは何か？

私達が最初に検討すべき課題は、定義に関する問題です。果たして「満洲学」とは正確に何を指すのでしょうか？この問題は、一見すると簡単なようですが、実際にはそうではありません。「満洲学」は「清朝史研究」と同義でし

ようか？ 満洲族として知られる人々の歴史に一義的に係わる研究でしょうか？ あるいは、満洲という地域の歴史を意味するのでしょうか？ それとも、満洲語の研究、あるいは満洲語の文献に関する研究のことでしょうか？あるいはこれら全てが「満洲学」に含まれるのでしょうか？それとも、全く別のことを指すのでしょうか？

満洲学を定義する初期の試みのひとつは、PelliotとE. Schlegelの弟子であり、おそらく西洋におけるアルタイ文化研究の最高峰であるDenis Sinorによってなされました。一九六三年に出版された小冊子において、Sinorは、満洲族は一六四四年以降に中国史に組み入れられるまでは自らの歴史を持っていなかったものであるから、「満洲学」とは主として満洲語の研究を意味するのだと主張しました。つまり、Sinorの目には、満洲学は基本的に中国研究の一部とみなされるべきものと映ったのです。この率直な中国中心的な見方は、理解できる面もありますが、今日の研究者の多くが (Sinor自身も含めて) 支持するものではないでしょう。一九六三年当時でも、一六四四年以前には「満洲族の歴史」などというものは存在しなかったという主張は大きな論議を呼ぶものでしたし、今日では、一六四四年以後に関しても「満洲族の歴史」と呼ぶべきものは見当たらないという主張が誤りであると主張する研究は多数出ています。満洲族の歴史というものは、いかに中国史に密接に結びついていようと——実際にこの両者の関係は非常

に密接です(分離不可能と言えるかも知れません)——それでも、やはり中国史とは異なる独自性を持ち、そして満洲学もまた独自性を持つというのが、ここ最近の共通見解であると言って間違いないでしょう。

満洲学の定義をめぐる問題に対してより優れた回答を与えたのは、ミュンヘン大学教授の故 Wolfgang Bauer です。彼によれば、「満洲学」は、満洲族の言語・歴史・文化を、それらが満洲語の史料、あるいは満洲語の発音で表記された史料(すなわち、原文が満洲語で、漢字の音を借りて転写された史料)、あるいは中国語から翻訳された史料——何らかの形で満洲族の歴史に直接関係するものであれば、他言語の史料(主に中国語)も含む——に現れたままに取り扱う³⁾ものです。これは一見すると、妥当な定義のように思われます。これは、定義を単に満洲語の史料による研究にのみ限定せず(結局のところ、私達が満洲族の歴史について知り得ることの大半は中国語史料から来ます)また大変柔軟な定義ですから、満洲族の歴史に関するものであれば何でも含めることができます。しかしながら、この定義は、文学・宗教・哲学・言語学・人類学といった他の学問分野に比べて、歴史研究にのみ不当な特権を与えているとの批判もありうるでしょう。一九八〇年代、九〇年代に復活した満洲族の民族意識に関する研究は、「満洲学」の一部とみなすことができるでしょうか? 満洲語訳された中国哲学の古典に関する研究はどうでしょうか? 今日

のシベ語の詩歌や民謡に関する研究、あるいは古典満洲語の文法に関する研究の場合はどうなるでしょうか?

Bauer の定義の欠点を指摘することは容易ですが、私には、彼の定義の後半部を削除し、短い挿入を加えることで、もう少し有効な定義を作ることができるように思われます。「満洲学」は、過去と現在における満洲族の言語・歴史・文化を、それらが満洲語の史料、あるいは満洲語の発音で表記された史料(すなわち、原文が満洲語で、漢字の音を借りて転写された史料)、あるいは中国語から翻訳された史料や他言語の史料(主に中国語)に現れたままに取り扱う⁴⁾。

Bauer はこの問題の難しさをよく自覚していたと言わべきでしょう。彼は、満洲学は、その定義の如何にかかわらず「中国化した満洲族によって生み出された過去三〇〇年間の中国文化の側面を取り扱われなければならない」と述べる一方で、同時にそれだからといって『紅樓夢』に関する研究を「満洲学」に分類することは「不条理」であるとも述べていたからです。彼が正しく指摘していたように、満洲学内部における最も根本的な亀裂は、満洲語を研究する人々(すなわち、必ずしも歴史的関心を有しない言語学者)と満洲族の歴史を研究する人々(とりわけ、清朝史初期を研究する歴史家)の間に存在していたのです。この亀裂は、ヨーロッパ、中国、日本を問わず、いずれの国の満洲学の伝統にもある程度見受けられるものです。同時にそ

3 ヨーロッパ、米国における満洲学：過去、現在、未来 エリオット

れは、誤れる二項対立の産物でもありません。なぜならば、歴史的なテキストの正確な読解のためには満洲語の習得は必要であり、実際に多くの歴史家は自らの研究に不可欠な研究分野として、満洲語の言語学的研究にも真摯な関心を寄せているからです。同様に、自らを主に言語学者と位置付ける学者の中にも、歴史に対して強い関心を寄せる人々があります。私は満洲学内部における歴史研究と言語研究の間の緊張関係は、健全かつ生産的な面があったのであり、あまり誇張されるべきではないと考えています。

満洲学の起源

先に触れましたように、清朝における満洲族の民族性を重視する研究手法は、「新清史」の最も重要な特徴です。しかし、「新しい」と言われるものがしばしばそうであるように、中国史形成において満洲族の果たした役割に対する関心というものは、実のところ、全く新しいものではないのです。それどころか、満洲族の研究は、一六〇〇年代に西洋において中国研究が誕生した時点から既に存在しており、二十世紀に入って衰え始め、重要性を失ったのです。従って、今日の満洲族に対する関心の高まりは、「発見」というよりは「復興」と言った方が、より正確なのです。

西洋知識人による本格的な中国研究は、イエズス会の中国ミッシェンの支援の下、Nicholas Trigault と Matteo

Ricciによって一五〇〇年代の後半に始められたというのが通説です。Ricciは一五八三年にマカオに上陸し、一六一五年にその著作を出版したのですが、彼こそが西洋の読者に最初に中国文明の総合的な見取り図を提供した人物です。彼が伝えた中国像というのは、古典的哲学と文学に通じた官僚に補佐された賢明な皇帝が支配する巨大で豊かな帝国であり、その国民は高度に洗練された古い文化を持ち、平和を愛し、勤勉に働くというものでした。Ricciの描いた肯定的な中国像は、それ以前のものとは比べて格段に精緻な情報に裏付けられたものであり（それ以前の主な中国像は、マルコ・ポーロによって描かれたものでした）、十七世紀を通じて全ヨーロッパに広まりました。この時点で、ヨーロッパにおける中国への関心はより新しい、学問的なものへと変化を見せ始めましたが、これは東洋との海上貿易が発展し、人々がこの地域に関するより多くの知識を求めていたという事情により、一層促進されたことは疑いありません。

しかしながら、Ricciの読者達には、平穏で寛容な国「シニム」(Sini)——この国が、かつてマルコ・ポーロが「キャセイ」(Cathay)と呼んだ国であることを彼らは最近知ったのですが——に起きた衝撃的な大事件の知らせが届くまでにさほど時間はかかりませんでした。この大事件とは言うまでも無く、満洲族による明の征服です。この偉大な中華帝国に降りかかった大災難に対する好奇心の表れ

として、中国に対する新しい種類の書物が登場しました。この種の本の最初は、一六五四年にオーストリア人イエズス会士 Martino Martini (一六一四—一六六一) によって出版されたものです。彼は七年間の中国滞在の間に満洲族による征服を目撃し、その後、ヨーロッパに帰国していたのです。『鞑靼戦記』(De Bello Tartarico historia)として知られるこの著作は、一六五四年にケルンで出版された後、すぐにフランス語、英語、イタリア語、オランダ語、ドイツ語、その他いくつかのヨーロッパ系の言語に翻訳されました。英語訳の完全な表題は、Martini がいかに中国に同情を寄せていたかを物語っています：『Bellum Tartaricum』あるいはタタール人の侵略による最も偉大で名高い中華帝国の征服：過去七年間で彼らは巨大な帝国を完全に制圧した』。表紙には、中国を「転覆」した人物とされた「Thein mingus」(すなわち、ヌルハチに与えられた元号である「天命」)の肖像画——想像画といった方が正しいかも知れませんが——が掲載されていました。(もっとも、Martini に公平を期すならば、同書の記述は決して一方的ではなかったということも指摘しておくべきでしょう。)

二つ目の重要な著作は、一六七〇年に出版された *Historia de la Conquista de la China por el Tartaro* (“History of the conquest of China by the Tartar”) である。筆者の Juan de Palafox y Mendoza (一六〇〇—

一六五九) は、司教として赴任していたニュースペイン(すなわちメキシコ)に滞在している間に、この本を書いたのですが、それが可能だったのは、フィリピンに逃れてきた中国人が伝えた征服の話が、彼のところにまで伝わって来ていたためです。この著作は彼の死後に、彼の残した文書類の中から発見され、スペイン語、フランス語、英語で翻訳出版されました。この本の出版者が、読者への「前書き」において、Palafox の歴史叙述には誤謬も多数含まれるであろうと警告を付している点には留意すべきですが、それでもこの著作により、満洲の征服に関するより正確な情報と新たな解説が提供されたのです。また、これは、ヨーロッパの知識人層の間で、「タタール」に対する高い関心が長年に渡って維持されていたことを示唆しています。

それまで知られていなかった満洲族 (Manchu) という名称もこの頃ヨーロッパに紹介されました。に関する文献が増えるに連れ、この「野蛮人」が実はそれほど非文明的でもなく、実際、以前の明朝の人々よりもキリスト教に対して深い関心を抱いているということが明確になったことは、ヨーロッパ人にある種の救いとして受け止められたことは疑いありません。十七—十八世紀のヨーロッパ人が満洲族について持っている知識の大半は、北京で朝貢したオランダ人によって伝えられた情報を例外として、それ以外の全ては当時広く読まれていた中国のイエズス会士による歴史書、書簡、地図から得られたものでした。また、イエ

スズ会士は様々な中国古典の翻訳にも従事し、一六六二年には『大学』(*Sapientia Sinica*)、一六六九年には『中庸』、一六八七年には『論語』の翻訳を刊行しました。四書のラテン語完訳は一七一年に出版され、十八世紀のヨーロッパにおける「中国ブーム」の火付け役となりました。

満洲学の分野で最も活躍したのはまさにこうしたフランスのイエズス会士たちでした。この結果、ヨーロッパにおける満洲学の中心地は、中国研究の場合と同様、パリとなりました。当時の人々は *Oriens* (一六八八) から満洲族の征服に関する新鮮な情報入手し、*Pertiera* と *Gerbillion* (一六九七) から康熙帝が満洲で狩猟をする時の習慣や彼の天文学や数学に対する関心について学び、*Bouvet* (一六九七) から満洲族の統治者がいかに聖者性と博愛心に富んでいるかについて情熱的な話を聞かせられた——これはライプニッツをして満洲族の支配者を「世に比類なき聖人君子」と称えさせるほどに感動させた——のでした。このような流れを受けて、後代の研究は、もっと歴史的で概念的に込み入ったものとなりました。こうした著作のうち最も著名なものは、イエズス会からの情報に基づき、当時の清朝の政治に関して詳細に記述した *Jean Baptiste du Halde の Description géographique, historique de la Chine* であり、これは一七三五年に出版されました。全四巻からなる、美しい地図を多数掲載したこの本は、ヨーロッパにおける当時の中国に係する書籍の中のベストセラ

ーであり (*Dr. Johnson* によれば、これまでヨーロッパに現れた中国関係書籍の最高傑作) これに匹敵し得るのは一世代の後に現れる *de Mailla* の全一三巻からなる『中国綜史』だけです。また、*Joseph de Guignes* がイエズス会士からパリに送られた史料に基づいて記した全四巻の『*Tatar*』史も、満洲族の歴史に関する著作として言及されるべきでしょう。

イエズス会士は、清朝の宮中で職位を得るために競争する必要があり(こうした競争が、日食・月食の日付や時間を正確に予想する問題と結びついていたことは良く知られています) このため彼らは満洲語を習得する必要がありました。この結果、彼らによって満洲語に関する情報がヨーロッパへ伝えられるようになりました。*Paremin* は彼の初期の書簡の中で満洲語について若干言及していますが、満洲語の文法に関する最初の本格的な著作は、*Verbiest の Elementa Linguae Tartaricum* です。これは *M. Thévenot の Relations des divers voyages curieux* と題された著作の中に収録され (*Verbiest* の著作と明示されないまま) 一六九六年に出版されました。これに続く本格的な満洲語に関する研究が西欧に現れるのは、約一世紀の後でも、一七八七年の *Amiot の Grammaire Tartare-Mandchou* と、二年後の満洲語-フランス語の辞書の出版を待たねばなりません。Langlès の満洲に関する有名な著作が世に出たのもこの時期のことです。また、それ

以前にも、一七三〇年にはAmiotが既に『Ode to Mukden』(『盛京賦』)のフランス語訳を出版しており、満洲族の歴史に関する全般的な関心、特に乾隆帝に関する関心が高まっていました。

十九—二十世紀の満洲学

十九世紀に入っても満洲学におけるフランスの影響力は変わりませんでした。一八一四年にはCollège de Franceで初めて、中国及びタタール、満洲の言語と文学、という講座が設けられ、Jean-Pierre Abel-Rémusat (一七八八—一八三二)が担当教授に任命されました。Rémusatは優れた言語学者であり、中国語を独学で習得し、二三歳にしてすでに中国文学に関する著作で高い評価を得ていました。彼の満洲語に関する講義は、一八二〇年にまとめられ出版されました。この著作は十九世紀にフランス語で多数出版される満洲語入門書の嚆矢となりました。他にもJulius Klaproth (一七八三—一八三五)、Hans Conon von der Gabelentz (一八〇七—一八七四)、Lucien Adam、Charles de Harlezなどが同様の著作を発表しました。ここでひとつ指摘しておくべきは、ヨーロッパの研究者が満洲語を重要視したのは、満洲語それ自体に対する関心というよりは、満洲語が漢文古典を読解する上で非常に役に立つ——というのも、この時まで既に漢文古典の満洲語訳

がなされていた——という点を評価したためであったということですが、例えば、Stanislas Julien (一七九七—一八七三)、Collège de FranceのRémusatの講座を引き継いだ人物)は、一八二四年に『孟子』のラテン語訳を出版しましたが、彼は満洲語訳を非常に重要な参考としていました。こうした満洲語の持つ利便性という側面は、先にイエズス会士により指摘されていたところであり、後にはドイツの研究者たち、特にErich Haerlによって強調されることとなります。

西洋における早くから満洲学の中心地であったパリ以外のもうひとつの中心地がペテルブルグでありました。満洲学において、VerbiestとAmiotの間に長い研究の空白期間が存在したことは先に触れましたが、実はこの間、ペテルブルグの学者たちは、この分野で目覚ましい進歩を成し遂げていたのです。満洲語関係の史料収集、翻訳、辞書編纂、教育の分野で業績をあげた代表的なロシア人研究者には、Rossochin (一七〇七—一七六一)、Leontiev (一七一六—一七八六)、Kamenskii (一七六五—一八四五)、少下ってZakharov (一八一七—一八八五)、Vasiliev (一八一八—一九〇〇)、Ivanovskii (一八六三—一九〇三)といった人物があり、彼らは特に翻訳と辞書編纂において顕著な成果をあげました(Zakharov'sの辞書は今日においても大変役に立ちます)。残念ながら、日本の発表においては、これらの業績に逐一言及する時間的余裕はございません

7 ヨーロッパ、米国における満洲学：過去、現在、未来 エリオット

ん。上の人物のうち、Ivanovskiiを除く全てが、在北京のロシア正教会の宣教師として、現地で中国語と満洲語を学びました。こうした言語習得により、彼らは、イエズス会の中国での活動が禁止された十八世紀の末葉以降、他のヨーロッパの研究者にとってアクセスが不可能となっていた文献や現地人からの情報を手に入れることができました。Pozdneev, Schmidt, Grebenshchikov, Poppe, Pashkov, Volkovaといった二十世紀以降の研究者の業績も考慮するならば、このロシア学派——Konstantin Yakhontov, Liliya Gorelovaと Tatiana Pang によって代表される——は、今日まで続く世界で最も古い満洲学の学派ということができましよう。

こうしたロシア学派の存在は、ヨーロッパにおける満洲学に全体として堅実な成長をもたらし、十九世紀を通して満洲学を生産的に研究者の多い学問分野として維持することに貢献しました。文献学、書誌学、言語分析に重点を置く研究手法は、ドイツ人の Klaproth と von der Gabelentz のみならず、後には、Wladyslaw Kotwicz にも影響を与えました。Kotwicz (一八七二—一九四四) はペテルブルグで学んだポーランド人であり、一九一八年のポーランド独立後にはルウヴに移りました。⑤ ペテルブルグで教育を受けた非ロシア人研究者の中で、Kotwicz 以前に最も知られていたのは、ドイツ人の Wilhelm Grube であり、彼は一八九〇年代までにベルリンにおいて満洲語の講義を開

始していました。⑥

私達は Grube を von der Gabelentz と並んで、二十世紀の輝かしいドイツにおける満洲学の創始者——このドイツ学派は、フランス学派を超える重要性をもつことになりました——とみなすことができるでしょう。⑦ 二十世紀におけるヨーロッパの満洲学の存続と発展は、ひとえにドイツ人の優れた研究者グループによるところが非常に大きいのです。Erich Hauer (一八七八—一九三六)、Erich Haenisch (一八八〇—一九六六)、Walter Fuhs (一九〇二—一九七九)、そして彼らの多くの弟子たちからなるドイツ人の満洲学者達は、主要な文献学的著作を著し、満洲語テキストの原本複製を作り、重要な満洲語文献の翻訳を行い、満洲族の歴史と文学に関する重要な研究を残しました。Hauer はベルリンで教えていましたが、彼の蔵書はボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学が後に入手しました。彼の *Handwörterbuch der Mandchusprache* は、今日まで出版された中で最も権威のある満洲語の辞書ですが、彼の早い死と戦争による中断で、この著作の出版は二〇年も遅れました。⑧ 彼はまた『皇清開國方略』の翻訳したことも知られています。⑨ Grube の弟子であった Haenisch は、最初ライプツヒヒで教えた後、Hauer の死後にベルリンに移り一九二〇—二五と一九三二—一九四五にかけてベルリン大学で教えました。Hauer と同様、Haenisch は中国・モンゴル学者であると同時に満洲学者であり、『蒙古秘史』

に関する研究で最も良く知られています。第二次大戦後、Haenischはミュンヘンに移り、中国研究の新しいプログラムを立ち上げましたが、満洲学に並んで蒙古学も長らくこのプログラムに含まれていました。

ドイツ人満学者の第三の人物はHauserとHaenischの弟子であったWalter Fuchsです。Fuchsは一九三〇年代から四〇年代にかけての大半を満洲で過ごしました。初めて瀋陽の医学書院でドイツ語を教えており、その後一九三八年から北平の輔仁大学に移りましたが、そこで中国人や日本人の研究者と非常に密接な交流を持ちました。彼の満洲学への貢献は実に膨大です。一九三六年、彼は満洲語文献学の基礎となる著作を出版し、その後この分野の研究著作を四〇年間に渡って出版し続けました。彼は戦後に移ったベルリン、ミュンヘンとボン（一九六〇年以降）において、Wolfgang Bauer, Martin Gimm, Hartmut Walravens, Michael Weiers, Giovanni Stary, Erling von Mendeとつた次世代の満洲研究者を育てる上で、大きな役割を果たしました。彼の弟子達は、過去から今日に至るまでの満洲族の言語、歴史、文化に関する研究を重ねてきています。ここでは、彼らの華々しい貢献を全て網羅することはできませんが、ひとつだけ触れておくべきものは、Staryの偉大な著作*International Bibliography of Manchu Studies*です。全四巻からなるこの本は、十九世紀以降の満洲関係の書籍と雑誌記事の完全なリストを含ん

でいます。

近年、GimmとWeiersが退職しましたが、彼らは明確な弟子と位置づけられる人材を残しませんでした。このため、大変残念なことですが、今日、ヨーロッパにおける満洲学の研究拠点はベネチアのいくつか所に限られています。私の知る限りペテルブルグでも満洲に関する研究コースは存在しておりません。二十一世紀における満洲学の長期的な展望は、決して明るいとは言えない状況です。近年の米国における満洲学の復興がなければ、西洋において三五〇年の伝統を持つ満洲学が消滅していたかもしれませぬ。

米国における満洲学

私は本日の発表において、フランス、ロシア、ドイツ各国のそれぞれ違った満洲学の伝統についてお話していますが、こうした分類はあくまでも大枠の区分に過ぎませぬ。過去いずれの時点においても、この分野における研究者の数は非常に限られていましたし、満洲学を志す学生は、常に指導者を求めて他国へ移動しなければなりませんでした。このため、ドイツの満洲学派の元老であるGrubeも最初はペテルブルグで満洲学を開始しましたが、後にドイツに移り、Hans Conon von der Gabelentzの息子であり、著名な研究者でもあったGeorg Conon von der Gabelentz（一八四〇—一八九三）の下で満洲語を学んだわけです。

実際、ドイツにおける最初の東洋研究講座の一つであるライプチヒの極東言語の教授職に就いたのは、Georg でした。他にも、満洲語を独学で学び、ライデン大学で研究をした（オランダでは満洲語が教えられたことはなかったようです）オーストリア人研究者 Erwin von Zach（一八七二—一九四二）がいますが、彼は満洲語の翻訳に依拠しつつ中国文学テキストを翻訳する仕事に大きな力を注ぎました。もっと複雑な経歴を持つのは Berthold Laufer（一八七四—一九三四）であり、彼をどの国の満洲学の伝統に位置づけるかは非常に困難です。ケルンで生まれた Laufer はベルリンで Grube の下に学び、最終的にはライプチヒで学位をとりました。しかしながら、ドイツで職を得られなかったため、彼は最初にコロンビア大学で二年間教え、その後シカゴの Field Museum に移り、一九三五年に亡くなるまで三〇年以上に渡り、そこで研究し著作を残しました。

Laufer は米国に最初に満洲学を紹介した研究者でしたが、大学で長く教えなかったために、弟子を育てることができませんでした。二十世紀の前半において、Laufer は米国で満洲学に従事する唯一の存在でした。しかし、この状況が一変するのは、ヨーロッパの学者——特にドイツ人とロシア人——が多数米国に渡ってきた第二次世界大戦後のことです。満洲学の分野において最も重要な人物は、Nicholas Poppe（一八九七—一九九一）と Denis Sinor

（一九一六—）です。彼らの影響は、Francis Cleaves（一九一—一九九五）のそれと並んで、米国における新たな満洲学の学派を作り出しました。端的に言えば、この学派は、ヨーロッパ系の諸学派の伝統を融合させたものに、日本、台湾、中国の研究からの影響を加味したものであることができます。

米国における満洲学には、二つの源流があります。ひとつはパリ、もうひとつはペテルブルグです。ペテルブルグ系は、Nicholas Poppe に由来します。中国に生まれ、ペテルブルグで育ち、教育を受けた Poppe は、アルタイ系言語学とモンゴル文学の分野で名を上げ、一九二五年にソ連の科学院に入ります。しかし、彼はスターリンに反対しドイツ人側についたために、戦後に一部の人々から対敵協力者の烙印を押され、戦犯として指名手配されます。あやうく逮捕を逃れた彼は、最終的には一九四九年にワシントン大学（シアトル）の教授に納まり、そこで約三〇年に渡り、満洲学とモンゴル学を講じました。彼の育てた学生の中には、James Bosson、岡田英弘、Stephen Durrant があります。Bosson は一九六三年に UCバークレーに移り、一九九六年に退任するまでそこに在職しました。彼はその後、現役に復帰し、二〇〇〇年から二〇〇四年までの四年間、ハーバード大学で教鞭を取りました。米国に移る以前に東京大学の和田清の下で学んだ岡田は、シアトルに数年とどまった後、ペテルブルグ学派の伝統を担って東京に戻

りました。Bosson の学生の中で最も名高いのは Jerry Norman であり、彼はワシントン大学で、最近退任するまで三〇年以上に渡り満洲語を講じました。Norman の学生の中で言及すべきは Stephen Wadley と Evelyn Rawski です。Bosson の晩年の学生には、私マーク・エリオット（一九八〇年代に師事）と、現在台湾の中央研究院の歴史語言研究所で研究する卓鴻澤 (Hooing Teik 'ton) (二〇〇〇年代に師事) がいます。これらの人物の中には、複雑な学派の系図を持つものが多数います。例えば、Norman は台湾で広禄 (Guang Lu) に学びましたし、私も岡田に学んだことがあります。

米国におけるパリ系統の満洲学は、さらに二つの支流からなります。ひとつは Sinor に、もう一つは Cleaves に由来するのですが、この両者とも、かの Paul Pelliot (一八七八—一九四五) の弟子にあたります。ハンガリー人として生まれた Sinor は一九三五年ベルリンのトルコ研究者の Prohic と満洲語を学び始め、一九三九年に奨学金を得てパリに学び、戦時中はフランスのレジスタンス活動に係わり、一九四八年にケンブリッジに移りました。その後、一九六二年に彼は米国に「輸出」され、インディアナ大学に職を得ました。彼が来任するや、インディアナ大学は内陸アジア研究の主要な研究拠点となり、今日に至るまで満洲語が教授されています。彼が育てた多くの学生の中には、Samuel Grupper, Larry Moses, そして Giovanni

Stary の下で研究を始めた Nicola di Cosmo がいます。モンゴル語研究者として著名な Cleaves は一九三〇年代前半に Pelliot の下で学び、その後、北京に移りましたが、彼が現地で幅広く収集した書籍は、ハーバード大学の満洲語コレクション (全米で最大) の礎となりました。彼は一九四一年から一九八〇年までハーバードで教えました。彼から満洲語を学んだ学生は非常に限られています。David Farguhar と Joseph Fletcher がその数少ない事例です。Cleaves の職を受け継いだ Fletcher は、Gertraude Roth-Li, Peter Perdue, Beatrice Bartlett として Pamela Crossley と「たゞく限られた数の学生に満洲語を教えました。その中で Roth-Li のみが満洲語の教職に就きました。彼女はすでにその職を離れましたが、Fletcher と共に使用した教材を基に作った教科書は、満洲語の英語入門書としては最も包括的なものです。私のような者——すなわち Pope 系統の学生でありながら、日本の満洲学から強い影響を受けている——が、今現在、Pelliot 系統と関係の深い大学の講座で満洲語を教えているということ自体が、米国における満洲学が諸学派の融合であるという事実を雄弁に物語っています。

結論：新清史

私は冒頭で、「新清史」の主たる特徴として、満洲語の

史料に対する信頼を指摘しました。しかし、米国において満洲語が常設講座となっているのは、ハーバード大学のみであり、それ以外ではインディアナ大学、ワシントン大学、ポートルランド州立大学において定期的に教えられているに過ぎないというのは、ある種の矛盾した現象といえます。これほどまでに満洲語の教育機会が乏しいわけですから、現在の満洲学の復興が果たして将来どのような結果に至るのかを予想するには時期尚早に思われます。私が強調したいのは、かつて一九六八年と一九七九年にも満洲学の復興を指摘する発言があったという事実です。私達が現在目の当たりにしているものは、満洲学の本当の「ブーム」なのでしょうか、あるいは過剰な期待の新たな例に過ぎないのでしょうか？

もちろん、時がその答えを出してくれるでしょう。しかし、私には今回の満洲学に対する関心の高まりは、過去のものと違っているように思われます。過去においては、こうしたブームの立役者は中国研究者か言語学者でしたが、今回は歴史学者が中心です。ハーバードで新たに満洲語を学んだ学生の数——過去六年間で二〇人に達します——も、現在、満洲語を重視する理由が存在することを説得的に示しています。問題はもはや「なぜ中国研究者が満洲語を学ばなければならないのか？」ではなく、「なぜ清朝史研究者が満洲語を学ばなければならないのか？」なのです。二五年前までは、この問いに十分に答えることは非常に困難

でした。私達は、満洲族による征服以前の時期が重要であることは知っていました。しかし、一六四四年以降についてはどうだったでしょうか。この問いに対する明確な回答の欠如は、日本と中国においてはもちろん、ヨーロッパにおいても研究者間に分断をもたらしました。清朝の草創期を研究する学者は、満洲語文献を使用しました（少なくとも、そうすることを期待されていた）が、一七〇〇年以降の出来事について研究する学者は、そうはしませんでした。この分断は、研究分野の形成過程にも大きな影響を与え、満洲語を学びたいと願う研究者は自然と清朝初期の研究を志し、一般的に満洲語を使いたくない学者は十八世紀、十九世紀の研究に従事するという傾向を生みました。

こうした分断は徐々に消えつつあります。この結果、生じた変化は何でしょうか。その答えは極めて明瞭だと思えます。清朝の文献に対するアクセスが大幅に拡大した結果、満洲語の史料に関する私達の知識は進歩し、満洲語が清朝を研究する歴史家にとって、時代の如何を問わず、有用であり得るといえるのは今や明白な事実です。米国において最近一五年間に現れた新しい研究は、満洲語の知識が——あるいは、満洲語でなければ、モンゴル語、チベット語、チャガタイ語——が、単に「清朝初期」専門家、あるいは「辺境史」専門家の領域に対してのみならず、清朝の支配そして中国史全般に対しても新たな視点を提供するものであることを説得的に提示しました。満洲人の特徴は何であ

ったのか？ 長期に渡って中国に留まった結果、満洲族に実際に生じた変化は何であったのか？ 清帝国の成功をどのように理解すべきか？ これらの問題に対する答えは、Beatrice Bartlett, Patricia Berger, Michael Chang, Pamela Crossley, Nicola Di Cosmo, Johan Elverskog, Philippe Foret, Philip Kuhn, James Millward, Peter Perdue, Evelyn Rawski, Edward Rhoads, Joanna Waley-Cohen などの研究の中に示されましたが、それは、私達がおはや清の統治方式が内陸アジアに起源を持つことを無視することができないと結論付けています。また、これらの研究は、次のような幅広い問題を取り扱っています。す：民族性と文化変容：政治と言語：皇帝権力と制度改革：宗教、美術、とイデオロギー：軍事文化と国家形成過程：ジェンダー関係：経済と植民地獲得のための領土拡大。Waley-Cohen が結論として述べているように、

私達は満洲族および中国における清朝の独自性をこれまで考えられたよりもはるかに真剣に考慮する必要があります。これが新清史の中核目標であり、そこから得られる示唆は、中国史および中央ユーラシアやその領域外の帝国の形成過程のみならず、帝国や帝国に係わる諸問題、そして近代への移行に関する難解な問題に対する私達の理解に影響を与えるのです。

このように色々な問題の探求に寄与し得るということが、「新清史」が近年になって注目を集めている理由であると思います。そして、二十世紀の歴史研究を支配してきた民族主義的で目的論的な中国史の叙述に疑義を呈する、この大きな知的なプロジェクトこそが、より多くの学生を満洲語（そしてモンゴル語、チベット語、チャガタイ語）の研究に導いていると私は見えています。もちろん、「新清史」に分類される全ての研究が満洲語史料を利用しているわけではありません。しかし、大部分はやはり満洲語史料を用いています。また、仮に満洲語史料を使用しない場合であっても、比較的満洲族を中心とした接近を試みています。こうした事情に鑑み、米国においては満洲学に将来があるとすれば、それは満洲語の知識が上述のプロジェクトとそのプロジェクト内で追及される諸問題にどの程度関連付けられるか次第であると言う事ができるでしょう。なぜならば、これらの諸問題は、清朝史——そして清朝史にとどまらず中国近代史一般——に何らかの興味を持つ人間にとって、否定しがたい重要性を持つ問題であるからです。最後に私は、このプロジェクトは、異なった伝統に立ちながらも共通の関心を有する研究者が共に集う国際的なプロジェクトになる時に——歴史的に満洲学はまさにこのような形で発展してきたのです——最も成功の可能性が高いということを付言したいと思います。ですから、本日のような学術交流の場こそが、そうした可能性を実現させるための貴

重な機会なのです。

満洲族はかつて十七世紀に中国を征服しました。私達は今日、おそろしく——あくまでずい、おそろしくの話ですが——別の意味で、第一の満洲征服、を目的たりたこととするのです。

注

- (一) 清朝史部宛に送られた事例として、次の著作を参照された。パトリシア・ベルガー、*Empire of Emptiness: Buddhist Art and Political Authority in Qing China* (Hawaii, 2004) / ヤン・ニシノビ、*Johan Elverskog, Our Great Qing: Mongols, Buddhism, and the State in Late Imperial China* (Hawaii, 2006); in Chaghatay, see David Brophy, "Conflict and Collaboration in 18th-c. Xinjiang: The Politics of the Tazkira-i 'Azān," unpublished paper, October 2006.
- (二) Denis Sinor, *Introduction to Manchu Studies* (New York: American Council of Learned Societies, 1963).
- (三) Wolfgang Bauer, "Manchu Studies in Europe," in Bauer, ed., *Europe Studies China: Papers from an International Conference on the History of European Sinology* (London: Han-Shan Tang Books, 1995), p. 419.
- (四) J. B. du Halde, *Description géographique, historique*

... de la China et de la Tartarie chinoise (Paris, 1735).

- (五) J. A. M. de Mailla, *Histoire générale de la Chine* (Paris, 1777-85).
- (六) J. de Guignes, *Histoire des Huns, des Turcs, des Mogols, et des autres Tartares occidentaux* (Paris, 1756-58).
- (七) Jean-Joseph Marie Amiot, *Dictionnaire Tartare-Mandchou Français* (Paris, 1789-90).
- (八) L. M. Langlès, *Alphabet Tartare-Mantchou* (Paris, 1787).
- (九) J.-P. Abel-Rémusat, *Essai sur la langue et la littérature Chinoises* (Paris, 1811).
- (十) J.-P. Abel-Rémusat, *Recherches sur les langues tartares* (Paris, 1820).
- (十一) H. J. Klaproth, *Chrestomathie mandchou* (Paris, 1828); H. C. von der Gabelentz, *Éléments de la grammaire mandchou* (Paris, 1832); L. Adam, *Grammaire de la langue mandchou* (Paris, 1873); Ch. de Harlez, *Manuel de la langue mandchou* (Paris, 1884).
- (十二) S. Julien, *Meng-tseu vel Mencium* (Paris, 1824). Julien は西文を漢系語の漢語や意匠に用いたが、*Meng-tseu vel Mencium*, *latina interpretatione ad interpretationem tartaricam ultramque recensite instructi*。# 47 / Cleveland Public Library 蔵本に『増補の漢系語系語トキスル』の題名に『増補の漢系語』とある。

- 語彙重編のついでにや、漢字のついでに、
 Gordon W. Thayer, "Julien's Manuscript Dictionary of the Manchu Language," *Journal of the American Oriental Society* 40 (1920), pp. 140-141.
- (22) Erich Hauer, "Why the Sinologue Should Study Manchu," *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society* 61 (1930), pp. 156-164.
- (24) I. I. Zakharov, *Pol'nyi Man'zhursko-Russkii slovar'* (St. Petersburg, 1875).
- (25) キーリン・エドワード・コトウィツの著「二十世紀の漢字」最初 Stanislaw Kalużyński の「ポーランドの漢字」Jerzy Tułsow の「ポーランドの大辞書」を編んだ。
- (29) Erich Haenisch, *Mandschu-Grammatik* (Leipzig, 1961), p. 6.
- (17) Grube の代表的な著書 *Der Sprach und Schrift der Juren* (Leipzig, 1896).
- (21) 二十世紀の漢字の日本と中国の漢字のついでに、本誌の「二十世紀の漢字」の「山清先生の漢字の歴史」を参照のこと。
- (21) Erich Hauer, *Handwörterbuch der Mandschusprache*, 3 vols. (Tokyo: 1952-1955). 世説の Handwörterbuch der Mandschusprache, Oliver Corff (Wiesbaden: Harrassowitz, 2007).
- (23) Erich Hauer, trans. *Huang Tsing Kai-kuo fang-lüeh* (Berlin and Leipzig: de Gruyter, 1926).
- (25) Walter Fuchs, *Beiträge zur mandjurischen Bibliographie and Literatur* (Tokyo: 1936).

- (22) Giovanni Stary, *International Bibliography of Manchu Studies*, 4 vols. (Wiesbaden: Harrassowitz, 1990 and 2001).
- (23) Georg Conon von der Gabelentz の著書 *Warring States Project of Massachusetts, Amherst of Warring States Project* の URL: <http://www.umass.edu/wsp/sinology/persons/gabelentz.html>
- (24) von Zach の Haenisch の著書 *Warring States Project* の URL: <http://www.umass.edu/wsp/sinology/persons/gabelentz.html>
- (25) 米国の中国語訳者 Richard Rudolph は、1940 年に「米国の中国語訳者の優れた漢字のリスト」を編んだ。このリストは「私の知る限り、Laufer を除く漢字の漢字訳者」一人のみである。Richard Rudolph, "Emu Tanggö Orin Sakda-i Gusun Sarkiyän, an Unedited Manchu Manuscript," *Journal of the American Oriental Society* 60. 4 (December 1940), p. 559.
- (26) 言及すべき人物は、John Mish である。彼は「New York Public Library」の著者である。
- (27) Gertraude Roth-Li, *Manchu: A Textbook for Reading Documents* (Hawaii, 2000).
- (28) 「幾十年の睡眠期間の後」今や漢字の復元が起つた。James E. Bosson, review of Leon Hurvitz, Nicholas Poppe, and Hidehiro

エリック・ハーンニッシュ、過去、現在、未来における漢字の復元、米国の漢字、ローマン

Okada, eds, *Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko*, JAOS 88, 3 (1968), p. 632. John Mish φ, Walter Simon and H. G. Nelson, *Manchu Books in London* (JAOS 99, 3 (1979), p. 510) は既に書評の中で、満洲学の「復興」どころか没落している。ただ、結局その復興が一時的な現象に過ぎなかつたことは、今となつては明白であらう。

(97) この見解は満洲語専門家によつても強調されてゐた。一九七三年に Fletcher は「ほとんどの全体的な満洲語の史料は、最も初期のものも含めて、中国から翻訳された。清朝中期から後期を研究する学者はよつて満洲語は役に立つかも知れない。しかし、それは必ずしも必要ではない」と主張してゐた。See Joseph F. Fletcher, "Manchu Sources," in Donald Leslie et al., eds., *Essays on the Sources for Chinese History* (Canberra: ANU Press, 1973), p. 145. しかし、彼は Beatrice Bartlett が清朝の文書館を築いた新発見を扱ひつゝ、一九八一年までの彼女の立場を述べて「その後、文書館はほぼ一歩の仕事をやめた」として、清朝の研究者は、満洲語を必らず使つて、他の研究トピックとして、漢語と中国語の文書を並べ比較対照したものは、ほとんど、主張を撤回した。Joseph F. Fletcher, "Review of Walter Simon and Howard G. H. Nelson, *Manchu Books in London: A Union Catalogue*," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 41, 2 (December 1981), p. 653.

(98) 満洲語史料の関心と研究は、拙著「The Manchu-Language Archives of the Qing Dynasty and the Origins of the Palace Memorial System," *Late Imperial China* 22, 1 (June 2001), pp. 1-70; 「中国の第一種史料 紫禁城内閣と宮中漢文档案の概況」、『東方学』85 (January 1993), pp. 147-157. また Bartlett の「筆者は清の文書館と最近の研究史をめぐつて論じてゐる」、『満洲語と漢語研究』、『Gugong xueshu jikan 故宫漢学季刊』24, 2 (Winter 2006), pp. 1-17.

(99) またの参考文書として、Beatrice S. Bartlett, *Monarchs and Ministers* (Berkeley: University of California Press, 1990); Patricia Berger, *Empire of Emptiness: Buddhist Art and Political Authority in Qing China* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2003); two books by Pamela Crossley, *Orphan Warriors* (Princeton: Princeton University Press, 1990) and *A Translucent Mirror* (Berkeley: University of California Press, 1999); Michael Chang, *A Court on Horseback: Imperial Touring and the Construction of Ethno-Dynastic Rule in China* (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2007); Nicola Di Cosmo, *Manchu-Mongol Relations on the Eve of the Qing Conquest* (Leiden: E. J. Brill 2003); Mark Elliott, *The Manchu Way* (Stanford: Stanford University Press, 2001); Johan Elverskog, *Our Great Qing: The Mongols, Buddhism, and the State in Late Imperial China*

(Honolulu: University of Hawaii Press, 2006); Philippe Forêt, *Mapping Chengde: The Qing Landscape Enterprise* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2000); Philip Kuhn, *Soulstealers* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1990); James A. Millward, *Beyond the Pass: Economy, Ethnicity, and Empire in Qing Central Asia* (Stanford: Stanford University Press, 1998); Millward et al., eds., *New Qing Imperial History* (New York: Routledge, 2004); Peter Perdue, *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005); Evelyn S. Rawski, *The Last Emperors* (Berkeley: University of California Press, 1998); Edward Rhoads, *Manchus and Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China* (Seattle: University of Washington Press, 2000); Joanna Waley-Cohen, *The Culture of War in China: Empire and the Military under the Qing Dynasty* (London: Tauris Books, 2006).

(82) Joanna Waley-Cohen, "The New Qing History,"

Radical History Review 88 (Winter 2004), p. 195.

(83) 中国の歴史をめぐっての議論と考察のありさま
 について、その歴史学への影響について: Zhao Gang,
 "Reinventing China: Imperial Qing Ideology and the
 Rise of Modern Chinese National Identity in the Early
 Twentieth Century," *Modern China* 32. 1 (January

2006), pp. 3-30, and Mark Elliott, "La Chine moderne: les mandchous et la définition de la nation," *Annales: Histoire, Sciences Sociales* 6/2006.